

本書の資料の博搜と切り込みの鋭さ、パースペクティブの広さと奥行きには、脱帽の他ない。だが、本書の成果を数え上げ賞賛するには、この欄はあまりに窮屈だ。むしろ僅かに感じた疑問や不満をあげてみるのが、紙数に見合っているだろう。

評者は著者の予想するような同業（国文学）者としての反発を感じない。むしろ基本的なところでの認識を共有しているといつてもよい。万葉集を国民歌集と意識したことはなく、「天皇から庶民まで」というフレーズも信じない。だがそれは評者だけでなく、津田左右吉、西郷信綱によって確立された「貴族文学としての万葉集」という規定が、現代の大多数の研究者には支持されているのではないか。したがって、三上・高津よりもアストンの万葉集観の方にむしろ共感する者が多いだろう。

むしろ、だからといって本書の意義がいささかも減殺さ

れるわけではない。とりわけ、万葉研究者は——著者自らと共に——おのれの拠つてたつ根本の所、なぜ他ならぬ万葉集を研究するのかという点への深刻な問い掛けを、本書によって迫られることになるだろう。あくまでもそうした共感の立場から、さらに疑問を一、二呈してみる。

「発明」の強調は、いきおい過去——前代までに達成されたもの——の否定的・消極的な評価に傾く。近世国学との連続面を著者は遮断する。明治の近代化は、確かにパラダイムの大幅転換だっただろう。しかし、「天皇から庶民まで」というスローガンや、民族的文化基盤に立脚するという性格規定は、やはり近世国学が用意した基礎の上に打ちたてられたものと見るべきではないのか——むしろそこには、母胎に育まれつつ母胎を喰い破るという弁証法的な関係があるにせよ。こうした疑問に答えるには、本書では近世国学への目配りが十分と

はいえないように思われる。言い方を変えるなら、万葉集は、それこそ成立以来いくたびもの「発明」＝変貌を経験してきたのではないか。逆説めいて聞えるかもしれないが、「発明」の繰返しこそが伝統をかたちづくる。変わらぬものは亡びてしまったのだ。

逆の方向についてもそれは言える。国民歌集観の仕上げの段階とも言うべき十五年戦争期の分析が無いことが惜しまれる。さらに言えば、戦後の第三次の国民文学論と万葉集との関わりについても——それこそが、万葉集研究の再生をもたらし、それがひいては現在の研究状況にまで及んでいるわけだから——やはり言及されて然るべきかと思う。もつとも、これらは既に著者の次なる研究の射程内に入っているのかもしれないが。

を論じた部分が面白く、赤彦論がとりわけ鋭い。また左千夫の位置づけも納得される。ただ、茂吉への言及が少ないのがもの足りない。ほかに、短歌滅亡論との関わりや、国歌の創出と唱歌の問題など、論じて欲しかった問題は少なくない。続編が期待される所以だ。

だが、著者に期待したいことはさらにある。この国の知的風土の常として、「国民国家」論は早くもステロタイプ化しつつあるように思われる。それを食い止めるためには、まさにその内部から方法的反省を積み重ねていく必要があるだろう。それが出来るのは、器用な文学史家ではなく、著者のような専門研究者だと思ふ。本書の視座を一方に保持しつつ、著者が万葉集研究に立ち帰り、批評の可能性を身を以て示すことを切望するものだ。

国民歌集観の定着にアララギ派——子規・赤彦のライン——がいかによに関わったか

(四六判・三五六頁・本体三二〇〇円・新曜社)  
—評者・北海道大学教授—